

冠省

昨年9月9日以来、九ヶ月ぶりに「近況」をお届けします。

2010年代以来、近代日本史、戦後日本史を読み解きながら新左翼総体のとらえ返しに取り組んでいましたが、次から次に見逃せない著書に出会い、学習したうえで「近況」を伝えたいと9ヶ月の間があきました。

更にここに来て600ページを超える貴重な大冊が送られてきて、目下精読中だそうです。これについても、夏には次回の「近況」で私見を述べる予定とっています。

みなさまのご支援に私からも深く感謝申し上げます。

先日5月12日の「電話」はいつも通りの15分きっかりでしたが、20万円もした補聴器のおかげで会話は弾みました。これで補聴器、入れ歯、老眼鏡を装着したサイボーグを自認していましたが、接見が終わって部屋を去る彼の背中は骨格がひとまわり小さくなったように見受けられます。

今年の秋には会いに行きたいと思っていますが、他人事ではなく此方もソロソロ無理がきかなくなっているので、せめて手紙をまめに書く気持ちでいるところです。

2023年 5月24日 島津カヨ

779-3133 徳島市入田町大久200-1 和光晴生

御無沙汰しました 久しぶりの「近況報告」です。私の服役年数が13年を超えた徳島刑務所では、相も変わらず「矯正」ならぬ「調教」の日々か。万軍号令による画一、一律、一斉の集団行動として続けられています。当所の収容定員は一人規模はok、2010年時点で500人台を割りこみ、その後もどんどん減り続けています。

私が居る工場は50人規模なので、今や30人台を割りこんだりしています。その過半数を高齢の無期刑囚が占めています。全国の刑務所も人数減と高齢化ということでは似たような状況にあるようです。

懲役刑を廃止して2年後に実施されるという「拘禁刑」で、どれほどの変化がもたらされるのか 受刑者からは期待されていません。矯正指導とかがいっさい増やされて、その分、工場での作業時間が削られ、作業報奨金が減ってしまうのではなか！と心配されているのが実情材のです。

私は6月で75歳になります 行政上の「後期高齢者」です。さすがに、体か、運動能力が、この二年ほどで随分と低下してしまいました。腹筋、腕立て、ストレッチ等は、なんとか続けています。ジョギングはもうきつくなり、ウォーキングに切り換えました。今や、老眼鏡に、上下16本分の入れ歯、左耳に補聴器まであつちなました。まるでサイボーグです。これらの出費(健康保険がたぬので、入れ歯に30万円、出入りの業者が扱っているのはOticon社製の補聴器のみで、20万円)で、この13年間で、なまっていって65万円

2/14

ほどの作業報奨金のほとんどは無くつきました。私は現在、2等工  
で時給が43円80銭、これに年ごとの上乗せされる割り増し  
金から10割増しにたっていて、月額1万円前後です。(特)無期  
(実質 終身刑)の身ですから、私に氣長に買ってもらいます。それでも  
「終活」を急かぬば、この気持ちはず強まっています。

警視庁公安一課の刑事3名が来所したのは 昨年12月5日の  
ことです。工場での午後の作業が始まってから2時間ほど経った頃、  
処遇部の職員から呼び出しを受けました。何の用件かは告げられず、  
作業帽は工場に置いておき、検身室で、舎房着に着替えよ、との通常の  
呼び出しとは異なる扱いで、とまどいました。連れて行かれた先は、処  
遇部の「調査室」(取り調べ室)でした。中には背広姿の3人が待ち  
構えていて、警察手帳を示したから、「警視庁公安一課から来た  
保阪、亀井、中村です」と名乗りました。3人ともこれまでに  
ない新顔です。この数年、姿を見せなかったもので、もう来がないかと思っ  
ていたため、意表をつかれました。これで拒否したなら、房内が押入れ、  
ノート、手紙等の押収、発信、受信の規制、差し入れ、ソープ等への  
検閲強化とかの女嫌からせよ、日常的なノウハウが予想されず、  
とて、とにかく応対だけにして、彼らに何を知らかっているのか、何を  
知っているのかをつかむことに努めることにしました。私自身は1975年  
のクマランフェルでの米国大使館領事部占拠作戦以降、旧日本  
赤軍内では、すっかりカヤの外の立場にたっていたので、公安が各々する

よりの機密事項は知らずには。むしろ「公安の方か はるかに多くの  
ことを把握しているはずで。」

たとえば、1997年K. 新たさか、ハッソ、  
バイルトで一斉拘束された折、踏みこみを受けた4つのアパートの内の  
一つから、組織機密を入力したフロッピーディスク80数枚と偽造  
旅券、スタンプ類などが、ハッソ官憲に押収されていて、ワイロと引き  
換えて日本の公安に送り提供されていたはずなので。これに加えて、  
2000年11月K 重信さんか大阪で逮捕された折、アジトから押収  
された大量の文書や物品からも多くの機密事項が公安の  
手に渡っています。私は、それらの内容についてはまったく関知  
していません。

今回の来所は「重信さんか出所したので、言話を聞き  
たいと思われましたので。」とのことです」重信さんか5月K. 出所したことで、

公安の活動は格段にやり易くなったはずで。スマホやメールでの  
やりとりはすべてアーケックされ、その内容まですべて記録に残り  
ます。全国に張りめぐらされた監視カメラは、群衆の中から一人の人物  
を特定でき、他のカメラとのネットワークで追跡を徹底できてます。

重信さんか出所したことで活発化していき関係者たちの動きを追い  
まくる捜査活動が一区切りつくところで、私のところか押しかけて  
来たのでしよう。私以外にも、府中や熊本に服役中の人も、80年代に  
勝手に帰国した「脱走兵」の御仁のところとかにも押しかけていた  
ものと思われ。今回、彼らから出た間には、1972年の「リビア」  
闘争（テラビブ空港銃撃作戦）以前に、旧ソ連系「怒涛派」

4/14

からエリトリアに派遣され、受け入れ態勢がなからと紹介された  
レバノンのPFLP (人びと解放戦線) を訪ねて来た人たちの  
その後について知っているか。というものと、1977年の日航機ハイ  
ジャック作戦(「タンカ事件」)の共犯として指名手配されている  
馬場という人についてかどうか。といったものがありました。いずれも  
私の未知の事柄です。こんな古い事実を今も追いつづける  
ことで、公安予算獲得のタネにしようとの在り方は、「重信さん出所」  
を機に、更に強化されていることと思われました。今回の、私への  
押しかけは「過激派」をタネにして獲得した予算を年度内に  
消化するための捜査活動たのでしよう。 3人分の往復航空料  
金、1泊2日のホテル代、それに3人分の出張手当て等で、何十万円分  
もの税金がムダにされているはずで、2日間にわたって私の「事情  
聴取」は、12月5日午後の2時間ほどと翌日午前中の1時間ほど  
だけでした。質問の多くは、私の獄中生活についてのもの。「徳島での  
処遇はどんな具合か」、「他の施設に移る話はあるか」、「体調は?」  
「食事はどうか?」、「好きな食べ物は何?」といったようなものでした。  
どうやら、私が獄中生活で、心身が参ってないか、それについて  
余地はないか、土ぐりを入れている感じなのです。公安刑事にとって  
「協力者(モ=タ)」を獲得することか、大抵の事柄、点数稼ごど  
なっているからなのでしよう。彼らの言辭から、彼ら公安は、これまでの  
私の「近況報告」を入手していることの確証を得ました。

5/4

私は「**特無期**」(實質上の終身刑)であり、出所の可能性はあつせん  
1970年代以来、獄中に在る公安事犯の無期刑の人たちも皆  
「**特無期**」であり、服役年数が40年に及んでいても、これまでに  
仮出所になった例は皆無です。私にとって「**特無期**」は、むしろ  
強みなのです。獄中に出来る限り長期にわたり居すわり続けること  
を「終活」の一環としてします。彼らから「来たていつですか」と  
問われたので、「拒否は出来ぬかぬ」と応じました。彼らも上からの  
命令でこんな出張を、あつらひとして居るのでしょう。来るなら  
来い。テス。その都度「近況報告」でレポートすることにした。

昨年夏、旧「日本赤軍」の総括に向け私見を「情況、誌夏号」や「**文藝春秋**」8月号で紹介されたこと一区切りとし、  
それ以後、旧「新左翼」の闘い総体のとらえ返しと、その総括実践の方向を模索する作業に集中していき、多くの旧・現活動家の方々の論考が既に、  
大量に発表されており、総括をめぐる論点はほぼ網羅され  
尽くしているようです。それら活動家の多くの方々は、社会に向け、  
特に、次の世代に向け、伝えていきたいとの意志を表明されて  
います。それらの教訓・総括が次世代の方々に伝わり、受け  
とめられ、継承されていくためには、公刊物による発表や面談・  
口伝よりも、総括実践として活動化・運動化されて行く中で  
こそ果されるはずで、それこそ「終活」となります。

佐賀旭著「虚ろな革命家たち」を読みおこし 連合赤軍リダの

森恒夫の評伝を、関係者・当事者たちのインタビューより構成した本で、集英社の潮高健ノンフィクション賞受賞作です。著者は1992年生まれ、今30歳そこそこの若い人材の方ですか。大学院で政治学・ジャーナリズムコースを専攻し、学生時代から「連合赤軍の全体像を伝える会」の月例会に顔を出していて、卒業後は、日刊ゲンダイ、週刊現代、週刊朝日の事件記者を務めているプロのルポライターです。今や高齢者となっている関係者たちの長期にわたる取材活動を重ねた力作ではあるのでしょうか。森恒夫個人に焦点を絞ったことにより、連合赤軍及び旧「新左翼」総体の運動、闘いをつまみ切れず終わります。多くの先人たちが示した総括・教訓が伝わっていただいのです。その結果、この本は終章が、中核派の前進社本部ビル訪問ルポになって、学生組織担当の幹部に暴力をめぐり質問ばかりぶつけ、「暴力革命が絶対に必要になってくる」との言質を引き出した上で、「今からでも遅くはない。あの(連合赤軍)事件は何だったのか。50年前の総括を始めてあげればよい。」「暴力を否定する政治が必要だ」との結論を述べることで終わっているのです。ヤバヤバ... 50年前の総括とかは、既に多くの方々によって、ほぼ語り尽くされています。それを伝わっていただく。ナントモイヤ... 中核派の総括ということでは

以下 Part 2 のように、中核派の総括をめぐって、関係者から寄せられたコメントや、中核派の総括をめぐって、関係者から寄せられたコメント...

以下「近頃報告」(1971年)「中核派の経緯」(1972年)元労働千葉活動家、尾形史人著「革共同50年私史」と、元政治局員で除名となつた水谷保孝、岸宏一著「革共同政治局の敗北」とが公刊されて、いずれも中核派の「政治決戦主義」の路線を批判して、この路線は、破防法弾圧の刑期を終えて出所した本多延嘉委員長が「革命は自分たちの世代で達成しなくてはならぬ」と言ひ出して始められたものでした。「ここで言われてゐる革命」は、

「政治革命」へと狭められたものとつてゐる。上記2冊の本は革共同からは「反革命の書」とされているようですが、古参の専従活動家たちも、ハコハラ、セクハラ、財政面での不正等で、100%はこれを明らかなとしてゐます。その中には、関西地区代表者、87年「10.8羽田」当時、三派全学連の委員長だった人まで含まれてゐます。それに加え、中核派の「革命軍」が解散されたことで、老兵活動家たちも去り、世代交代が果されたようです。それが路線上にも何らかの変化をもたらしているはずなので、清水丈夫議長(83歳)が2021年1月に突如記者会見に現れてゐました。上記2冊の本で、政治決戦主義者として批判されてゐる人で、私のところに来た公安刑事は「中核派はSNSで若い人たちに呼びかけをやってゐますよ」と嬉しそうに言つてました。公安内閣の理由づくりと、予算請求のネタとすると期待してゐるのでしょうか。

江刺 昭子 著 「私たちがこぼした血 - ある赤軍派女性兵士の

25年」を讀みました

連合赤軍の山岳パースにおけるリソ、

肅清の犠牲者として 遠山美枝子さんの評伝です。遠山さんの  
真摯で徹底的な人物像の紹介にとてもおもしろい。フロント～連合  
赤軍の検証への広がりを持つ常作とあっていい。彼女の活動歴  
の中に登場する多くの当事者や関係者たちとのインタビューを通じて  
フロント（共産同）内に「専従制度」がどのように形成されていったのか  
が、実に具体的に明らかにされています。前回の私の「近況報告」  
で触れておいた、神津陽さんが「新左翼の非民主的組織悪の  
根源」であり、「左翼が反省なく拡大路線を採用する根拠」とを  
指摘している。その「専従制度」形成過程を明らかにする史料  
ルタージョとして、とても貴重な本であると言えよう。

「情況」誌 2020年夏号に、高原浩之さんから 佐野茂樹さんを

偲ぶ」という一文を寄せています。

その中で、68年初めに、佐野さん

に率いられた「フロントの指導権を奪取しよう」と、京大・大阪市大・同志社大生  
たち数十人が「組織された暴力」と「プロレタリア国際主義」を掲げ、上京  
した経緯について述べています。佐野さんは、60年安保闘争当時は兵庫  
県で活動していたことで、安保フロントがプロト通派、革通派、戦旗派  
に三分解し、消滅した動向から産生し、関西フロントとして活動を  
続けていた人です。68年2月のフロントク回大会で議長に就任したの  
ですが、68年12月のフロント8回大会で辞任し、その後、塩見さん

とんてすが、過激な路線を採り始めた頃、関西に目を付けて  
 しまっていた。関西からの学生たちと、それと合流した早大フリの  
 荒谷介さんたちとか、拠点として寝泊りしていたのは、明治大学の  
 学生会館、自治会室でした。その頃、明大は、67年2月に学費  
 値上げ闘争の終結に向け、学生自治会指導部を握っていた  
 フリト（マルクス主義戦線派）が、大学当局とホス友で合意に  
 したことで、他党派から袋叩きにした戦線逃げて  
 しまったことから、党派の空白地帯と化してしまっていて、他大学の  
 学生たちが入り込む余地が生まれていたのです。彼らは、明大  
では「外人部隊」であり、学生大衆とは日常的な接点を持たず  
 来、もっぱら活動家学生だけを相手に活動するべくあり、  
 どんどん現実離れした過激な方針へと突っ走るようになって  
 しまっている。60年安保闘争世代からは、フリトの出自の社会党、  
 共産党への左翼反対派であり、ことから、戦闘的、過激な方針を  
 採ることにより、自己主張することばかりで、とのとらえ返しを呈示されて  
 いる。活動家集団だけの行動は、とにかくより戦闘的、より  
 過激な方針を掲げることで、自組織内でも、他党派との競争でも  
 優位に立ちたいとすることから、繰り返されてきた。その結果、革命を政治革命  
 ではなく、それと、権力奪取へと狭められて、活動家集団だけの権力の  
 直接対決、万年政治未戦主義へと流れ、街頭闘争の激烈化  
 から、銃・爆弾による武装闘争へと突っ走ってしまっている。

過激な方針で突走る活動家たちから連想されるのは—

さながら海に向かって死の突進を続ける野ネズミ集団の姿です。先頭を走り、集団を領導していたリーダーも前方は海に突き出た岬であり、このまま走り続けば海に落ちるしかないと知った時には、後ろに付き従って突進を続ける群衆に背を押し、集団丸ごと海に落ち全滅してほうろくタンです。このように自滅への行動は、連合赤軍に限らず、闘いを「政治革命」に狭めてはる党派に共通した。

高原浩之さんか「情況」誌 2020年夏号に寄せた

論考では 連合赤軍事件について、その先行要因として、ブント内で孤立しつつある赤軍派フランクによる、69年7.6日大和泉校舎への襲撃と、その前年、68年3月のブント7回大会の折、マルクス主義戦線派を暴力で排除したこと等を挙げています。更に、共産同赤軍派の過渡期世界論は、革命の根拠を「帝国主義から社会主義への過渡期」という歴史認識にのみ求め、日本革命を日本帝国主義の内在的矛盾からではなく、ほぼ全て、国際主義＝「3ブロック(帝国主義本国、社会主義諸国、第3世界)の階級闘争の結合」から展望していたこと、その極限が「世界武装プロレタリア」と「国際根拠地建設」に基づく国内での武装蜂起・革命戦争方針(「蜂起貫徹・戦争勝利」)であったこと、その闘いに向け、当時高揚していた諸分野・領域での闘争に対する指導方針を持たないまま、ただ活動家をリクルートし、動員するばかりの方針が、たかつかこと等をとりこ返した上で、21世紀においては

2014年の階級の社会主義革命は工業と農業の関係を再編し、社会を再編し、自然と共生する新しい内容となるだろうと、将来人の展望について述べています。このような提起には、近年若い論客である斎藤幸平さんが「新世の『資本論』」で紹介している「脱成長」<「エモズ（公共領域）の再生」> スロイン、フランス等で進展している「国境を越える自治体主義（ミューニシピリズム）」に通じるところがあります。日本でも数年前に、国会議員から世田谷区長に転じた方がいました。昨年は、スロインでの「ミューニシピリズム」の研究者の方が、市並区長選挙で勝利していました。地方自治体のレベルから住民参加型に比べたら、住民が主体となる政治が発展し、国内・国際レベルでの広がり、つながりへと実体化していけば「社会革命」が国際的な規模での展望を持ち得るでしょう。高原さんの論考では言及せず、

江刺 昭子さんの著書で明らかにされているのは、フリット・赤軍派等の専従活動家の方々は生活力・社会性が欠けていたという事実です

佐野茂樹さんは終生、支援者からのカネのお世話だったようですし、高原さんも伴侶とあって、遠山美枝子さんが日伏夜間部在学中に、キリンビール勤務で貯めていた預金の切り崩しに変えられていたのだそうです。他の党派活動家の方々にも、どうやって生活していたのか、食べていたのか不確かだ何かが多いようです。そのような専従活動家の在り方は、いつまでも組織に居すり続け、いよいよ生活離れし、非現実的なく政治革命一本槍の闘争方針で突っ走ることへとつながっていったものと思われています。日本共産党も1922年の結党から100年経過し、党勢は

衰退の一方向にある。200人ほどからなる中央委員か全員、党から給料をもらう。中央委員会総会では、常任幹部会からの提起を毎回、全会一致で採択することを繰り返している。志位和夫委員長の在任期間は20年を超えている。そのような体制をめぐり、

今や組織内から批判の声が統出している。古参党员による「ヨシ・日本共産党宣言」(松竹伸幸著)や「志位和夫委員長への平紙」(鈴木元著)などが公刊されており、それら著者2名は、ともに除名処分を受けたことから、共産党の旧態然とした体質への批判が、党内外からずいぶんと高まっている。

**革マル派の場合は、自組織の拡大をもち、革命の戦術とするような在り方から、組織の維持、温存と勢力の拡大のためには、権力に身を寄せることも辞さない行動形態を採り続けている。**そのような在り方は、学生運動でも、労働戦線でも共通している。拠点校である早大では、大学当局の意を受け、他党派や黒マルやノンセクト全共闘系の活動家たちをゲハルトやリソテで一掃し、キャレトスに秩序をもちらせるところで、大学当局から御役御免とされ、資金源である「早稲田祭」の運営権を奪われ、自治会制度も亡きものとして、勢力がすっかり凋落していった。

**労働戦線においては、**自民党政府は、社会党の基盤である国労、総評、ポレクに向け強行に国鉄民営化に、働革マルに乗っかり、その功績で、JR東日本労組を新たな根城にすることに成功した。ところが、自派以外の労組員や職員に対する暴力による恐怖支配と

152  
動労時代以来のリーダー、松崎委員長親子での不正蓄財等の腐敗行為が露呈したことから、JR東日本当局が、御用労組を立ち上げる攻勢を構へ、たちまち勢力が衰退してはたよるで。

革マル派本体にあっては、元政治局員に率いられた分派  
が「探究派」と名乗り、1963年の中核派との第一次革共同分裂に

続く、第二次分裂と称する動きが起きていた。かくして、50年代以来続いてきた「社・共」の既成政党も、「新左翼」の時代も

役員、活動家、支持者たちの高齢化もあって、終幕を迎えて

いる。神津陽未刊行論考集を精読中です。2020年

8月JCA出版のA5判600頁を超える大冊です。1966年から2020年までの間に公刊誌紙や組織内向けのパンフ等に発表された諸論考のクロニクルです。25年以上国外に居る私にとっては、国内での党派や全共闘運動の経過を具体的に知る上でも、呈示されている内容を学ぶ上でも、とても有益な大著となっています。

この本の巻頭文「刊行に際して」は、「「政治革命の世は去り、社会革命の世に入った」との確信は、さらに強くなつた」との結語で

締めくくられています。神津さんが指導して来た「叛旗派」(68年結成、76年自主解散)は、他党派との対抗上、党派を名乗っていません。党派というよりは、中央大学の全共闘(「全中闘」)が実体でした。その基盤となつて来たのは、66~67年の学館運営権闘争、処分撤回闘争、68年の学費闘争での全面的勝利であり、これらの闘争の中で培われた共同経験、「共同性」

でした。「全中闘」による、個別闘争での連続勝利は、全国でも稀有な例です。これだけ活動家たちの結束が固く、学生大衆の広汎な参加をもちあわっていた、ということなのでしょう。この中央大学でのケースにとどまらず、当時全国的に燃え上がっていた全共闘運動は、学生が学園の主体となっていたことにおいて、〈社会革命〉の萌芽であったという共通性を有しています。革命は政治革命・社会革命・文化革命が相互媒传的に発展して行くことで成就します。旧「新左翼」諸党派の闘いは、政治革命の領域に狭められた結果、活動家集団だけでの権力奪取に向けて万年決戦主義に流れ、多くの過誤・失敗を繰返して来ましたが、これほど多くの方々によって発表されて来た総括も政治革命に向けて闘いのとらえ返しが主になつています。それも、敗北している、「敗北した」という客観的事実を受け入れ、認め、踏まえたいものとはなつていません。「我闘いは終わつたよ」といふ気持はあるにしても、旧「新左翼」世代はあと何年か後には死滅し、その運動も消滅してしまいます。今や敗北の総括こそが重要なのであり、そこからしか、次代へ伝え得るよすが教言も残せません。このような状況を克服して行くことに向け、全共闘運動の総括こそが、重要になります。

私は、次回の「近況報告」で、これらについての私見を提起したい。8月中旬には果したうと思つてます。よろしく――。

2023年5月 和光晴生